



鳥籠

(五)

岡本綺堂

普通の人物から云へば、死んだと思つてゐた人が無事に生きて返る云ふことは、確に目出たいことであつた、悦ぶべきことであつた。而も敵の捕虜となつて阿容々々生きてゐた云ふのは、日本の軍人としては少佐の面目が立たなかつた。世間の同情は俄に冷めた。

勿論、少佐さても命が惜さに捕虜になつたのでは無かつた、重傷を負つて殆ど前後不覚で倒れてゐる所を、敵の野戦病院へ昇き込まれたので、死なうとしても死なれない運命であつた。併し世間の人は其事情を斟酌するほかに寛大でなかつた。爰に少佐夫人自身が他人に對して考へたやうに、命を惜む



卑怯者も少佐を嘲つた。日本軍人の面汚しである少佐を罵つた。

「此位なら寧ろ死んで下されば可かつた。」

辰子も彌七も生きて還つて來た少佐を恨めしくも思つた。人間は死なうと思つても必ずしも勝手に死ねるものではない云ふことに、彼等も世間も氣が注がなかつた。

たゞし自分には何の疚しい點が無いにしても、少佐は軍人として世間の有らゆる侮辱や嘲罵に堪へなかつた。彼も遂に決心した。ある夜密に辰子も彌七に對つて、自分は既に内地では何をすることも出来ない、世間でも恐く永久に自分を葬つて了ふであらう。就ては自分一所に捕虜になつてゐた部下の兵卒數人を連れて、遠い南洋へ渡つて腹膜の栽培を試み、彼地で新しい生涯を拓かうと思ふ。それには妻子を伴つて行くことは出来ない。自分は身一つで此のまゝ南洋へ去つて了ふ覺悟であるから、後のこゝを何分頼む云ひ聞かせた。

一旦は生きて還つたのを恨めしいやうにも思つたもの、彌七は豫て少佐の人格を能知つてゐた。彼は少佐が卑怯で生捕られたので無い云ふことを固く信じてゐた。随つて少佐に對する世間の此頃の攻撃が餘りに峻烈であるのを顧る不満に思つてゐたので、今この話を聞いて彼は大に主人に同情した。辰子も反對しなかつた。

少佐も愈出發するまいふ前夜に、彌七の家へ密に訪ねて來て、辰子の様子に此頃餘ほ可憐いやうにも見ゆる或は私の立つた後で不都合のことでもあるかも知れぬ。その場合には雄を前の方へ引取つて、さうぞ面倒を見て遣つて呉れ、其代りに私の方でも都合の能るだけは送金するから、呉々も頼んで行つた。其時には少佐の眼にも涙が見わた彌七も涙を零しながら受合つた。

少佐は日本の土地から消ゆるやうに姿を晦まして、南洋へ遠く去つて了つた。

彌七は二度までも少佐に頼まれた。初の誓は少佐が生きて還つたことに因つて殆ど反古同様になつて了つたが、今度の誓は何うしても果さなければならぬ。彼は固く決心して、其後も相變らず忠實に貝津家を扶けてゐた。元來この貝津家には餘り近しい親類もなかつた。それでも少佐が戦死を傳へられた當時には、同僚にも知人にも相當の同情があつたが、捕虜になつて生きてゐたことが知れ渡ると同時に、雖も彼も段々に容附がなくなつた。此のまゝ、以日までも押して行つたら、生活にも差支へるやうになりはせぬか云ふ懸念さへ起つて來た。

少佐の豫言は外れなかつた。今まで貞淑堅固であつた辰子も世間の烈しい攻撃に毎毎に包圍されて、恐ろしくは自暴になつたのであらう。少佐が南洋へ旅立した、其後輿論が全く今迄とは變つた人のやうに見えた。彼女は綺麗に着飾つて、笠は上野や日比谷を遊び歩いた夜は寄席や活動寫眞館に出入した。彌七が驚愕の眼を穿つて窺つてゐる中に、彼女は目星の家財を賣拂つて何處へか姿を隠して了つた。彌七兄妹が氣が注いで行つて見た時には、空店同様の家に雄が一人で泣いてゐた。

川柳

漁師 町南洋云ふ感が有り
 黒幕が有つて煙草の店を出し
 殺死者の血潮を吸ふ黒い猫
 寶家の屋根に大きな黒い猫
 黒袴の屋敷を讀む女なり
 後添の御を賣ふのか黒焼屋
 大正の御代に下谷の黒焼屋
 尼寺にオレだけ黒い寺男
 嫁人へ黒髪を來る痴話喧嘩
 黒髪を亭主に飲ます持參金
 地獄首下は黒闇地獄也
 天黒い米一萬二千尺 小次郎
 軸黒髪蛇にもな女優巻 劍花坊
 ▲次の川柳題「人生の秋」廿五日切
 用紙捲書、數々不詳、歌句柳川掛宛



鳥籠 (六)

岡本綺堂

左らでも少佐に對する批難の聲が消
 ぬない中に、ついで夫人の家出とい
 ふ不評判が重つたので、彌七も坂町に
 二居辛くなつた。こゝに住んで居ては坊
 十ちやんを育てるにも都合が不良い考
 へたので、彼は翌年の春に現在の番町
 へ引越した。これと同時に彼の身の上
 に縁談が起つた。

彌七の同僚の堀口といふ男が彼の篤
 實なのを見込んで、自分の近所に住ん
 である竹嶋といふ家の娘を彼の嫁に世
 話したいと云ひ出した。彌七も小さい
 妹一人では坊ちやんの世話も十分に
 届くまいと思つたので、結局その娘を
 貰ふことになつた。娘はお秀の云つて



其時廿一であつた。彌七は廿五であつ
 た。

お秀は母のお安の弟の精太郎の
 三人家族で、他に一人の小僧を遣つて、
 下谷の西町で雜貨店を開いて居た。裕
 福云々ではないが、生計に困るやう
 な家でもなかつた。媒人の堀口は彌
 七の家の生計向も大抵察して居るの
 で、この縁談が纏まるに共に、お秀の
 實家から幾許かの商品を通して貰つ
 て、内職半分に此方でも雜貨店を始め
 たら何うだ、少くも家賃ぐらゐは稼げ
 るであらうと云ふ意見であつた。これ
 も双方に異存はなかつた。話は滑るや
 うに進行して、お秀は磯坂家の人にな
 つた。

お秀の母は善い人であつた。弟の
 精太郎はまだ小兒扱いで別に何の邪魔
 にもならなかつた。お秀も正直な女で
 あつた。殊に彌七に取つて幸福なこゝ
 は、お秀が小姑のお照に非常に仲の好
 いこゝであつた。二人は實に血を分け
 た姉妹よりも睦じかつた。彌七は相變

らず會社に勤めてゐた。店はお秀にお
 照が引受けて毎月幾許づつか働いて
 ゐた。

斯うして四五年は平和に暮したが、
 その平和の空氣が又もや少しづつ、動搖
 を始めたのは、例の坊ちやんの問題で
 あつた。英雄はお秀が縁付いた年から
 小學校へ通ふことになつたが、彼は恰
 恠で温順い兒であつた。彌七夫婦やお
 照にも能く愛してゐた。學校の成績も
 悪くなかつた。お秀も此の坊ちやんを
 厄介者扱ひにしてゐなかつた。が、唯
 お秀の腑に落ちないのは、毎年一度ぐ
 ららるづ、彌七の許へ幾許かの金を送つ
 て來る人のあることであつた。

それは父の少佐から送つて來る金で
 あつた。少佐も部下を連れて南洋へ渡
 つたものの、無資本同様の身の上では
 最初から大きな事業に取掛る程には行
 かなかつた。勿論第一本で此地へ來て、
 十年の後は一應の資産を作つた者も
 ある。少佐等も末を樂みにして、差當
 りは他に雇はれて一種の勞働者同様に
 働いてゐるが、風土に馴れない爲に病
 氣に罹る者も多かつた。それ等の事情
 で、少佐からは中々十分の送金は能な
 かつた。それでも我子を忘れないと見
 せて、一年に兎も角も一三十疋ぐらゐ
 は送つて來た。

結婚の當時、彌七はまた氣心の能く
 知れないお秀に對つて舊主人の秘密を
 洩すのを憚つた。彼は誰に對しても成
 べく其んな耻がましいことを聞かせた
 くなかつた。お照にも英雄にも秘密を
 守らうと誠めて置いた。お秀に對つ
 ても少佐は已に請州で戦死したやうに
 云つて置いた。彼は後に至つて自分の
 妻を欺いてゐることを心苦しく感じた
 が、今更取消すことにも能ないやうな羽
 目になつて、先づ其まゝに過ぎてゐた。
 その秘密も遂に暴露する時が來た。
 南洋から來る送金に就てお秀から執念
 深く問ひ詰められた結果、彌七も到頭
 正直に白狀した。

「まあ、坊ちやんの阿父さんは捕虜に
 なつたのさ。お秀の顔には嘲笑の色
 が泛んだ。少佐が捕虜になつたのは決
 して卑怯でなからうと云ふことを彌七は詳
 しく説明した。

其以來お秀は坊ちやんを餘り尊敬し
 なくなつた。別に虐待するやうな氣振
 は些々も見せなかつたが、以前よりも
 何か付けて敬意を欲して來たらしく
 彌七の眼に映つた。
 「それはおさんのお推ですわ。」「お
 照は聲へ通つて辯護してゐるが、彌七
 は何うも自分の邪推ばかりでは無いや
 うに思つたので、時々にお秀に對つて
 其れを注意した。

「坊ちやんを大事にして呉れ。」
 「決して疎略に致したことはありま
 せんよ。」
 お秀は何日でも斯う答へた。併し此
 の夫婦の間には、不知不覺の中に薄い
 隙間が出來た。



鳥籠 (七)

岡本綺堂

英雄は今年の春、小學校を滞りなく卒業して、神田邊の某中學校に通ふことゝなつた。今までの小學校時代は違つて、彌七の資力が俄に重くなつた。月謝ばかりでも三區取られる上に、教科書も學校用品も以前よりは高い物を買ふやうになつた。其上に着せて食はせて小遣ひを渡しては、少佐から送つて来る一年二十十弗や四五十弗では到底引足りなかつた。これも幾分かお秀の顔色を悪くした。

それが結局、詰らないことから大い衝突を惹起すやうになつた。

英雄は小鳥や犬が好であつた。犬は見す／＼、幾許かの税金を取られるの



で、何ふこゝが能なかつたが、英雄は友達の家から竹籠に入つた一羽の繡眼兒を買つて来て、この正月頃から大事に自分で飼つてゐた。繡眼兒は四月頃になつて高音を張つた、其頃から英雄は神田の學校へ通ふやうになつたので、毎朝早く家を出なければならなかつた。随つて繡眼兒の籠を洗つたり餌を遣つたりするのは、お照が引受け

るこゝになつた。

お秀は生物を飼ふこゝを好まなかつた。殊に、鳥や繡眼兒のたぐひは毎日の世話が随分面倒なので、彼女は殊に思やがつてゐた。たゞ自分直接に手を下すのではないにしても、お照が毎朝忙しい中で面倒な生餌なごを拵へてゐるのを見るに、如何にも氣の毒なやうな、馬鹿々々しいやうな氣がしてならなかつた。三度一度はお照に對つて「好加減にしてお置きなさいよ。なご、云つた。それが又、彌七に取つては不快の一つであつた。

お秀は貝津少佐といふ人を全然知らなかつた。少佐が何んな人で、自分の

夫が其人に何んな思を受け、お秀も知らなかつた。お秀は夫の話を聞いた。夫では自分の頭には能く沁み込まなかつた。お秀の眼から観るに、英雄は要するに飲の掃度になつた意氣地無しの人の子に過ぎなかつた。彼女が坊ちゃんに對して、夫や妹と同じやうな心を持ち得なかつたのも無理ではなかつた。而も彌七から云へば、それが確に不快の種であつた。

その繡眼兒が八月の某日に籠を逃けて了つた。當時お照も英雄も生憎に留守であつた。彌七も居なかつた。お秀もその逃げたのに氣が注かなかつた。時もあらうにお秀一人の時に、其鳥が偶然逃げた云ふのが、此に一つの面倒を醸す種になつた。

彌七はお秀の平生から推して、彼女が故意に逃したのではないかと思つた。お秀を詰問する詞も自然に暴くなつた。痛くもない肚を探られて正直な彼女は勃然とした。

「鳥だつて羽があるから飛んで行つたんでやう。」

「それだから籠に入れてある。誰か戸を明けなければ逃る筈がない。」

夫婦は漸次に云ひ算つた。二人の胸に纏まつてゐた平生の不平が一度に爆發した。お秀は夫に對つて、坊ちゃんが大事故か、女房が大事か云つた。彌七は坊ちゃんが大事故だ云へた。夫婦は既う離れ々々になるより他はなかつた。お秀は到頭家へ歸つた。この籠を解くべき媒介人の堀口は一年前に既う死んでゐた。

彌七は英雄の爲に近所の鳥屋から果立の繡眼兒を買つて来て、再び舊の籠に飼つた。併し逃げた鳥は歸つて来なかつた。お秀も戻つて来なかつた。

恰例な英雄にも夫婦喧嘩の遠因は能く判らなかつた。だが、其の近因が自分の鳥にあることは明白な事實なので、彼は此の破裂を氣の毒に思つた。悲しくも思つた。

「お秀を何故歸して了つたの。彼、額むから最う一度お秀を呼んで来て呉れないか。」

彼は彌七に度々強請んだ。お照も姉さんを呼び戻して呉れ泣いて頼んだ。行き懸りで不意に別れて了つたもの、彌七も例の坊ちゃん問題を以ては、お秀に何の缺點も無いことを知つてゐた。さりして、自分の方から下手に出て、お秀を呼び戻すこゝも能なかつた。三人は二月ばかり寂しく暮した。暑氣は大溝の真ん中に段々に消れて、夜は石垣に響れる水の音に付くやうになる。家の中はますます寂しくなつた。お照は何だか心細くなつて、店番をしながら一人で泣いてゐるこゝもあつた。

新刊雑誌

- ▲大正三年生籍検査所調査報告生籍検査所 (水曜九月) 府下四久保水産社
- ▲東洋學藝雜誌 (九月) 牛込辨天町法華會
- ▲法學 (九月) 牛込辨天町法華會
- ▲實用新案公報 (二七六) 神田東洋學藝社
- ▲商標公報 (二八五) 有明町帝國發明協會
- ▲富強世界 (七月) 神田東洋學藝社
- ▲大日本紡績聯合會月報 (二七六) 大板江戸堀南通一同聯合會



鳥籠

岡本綺堂

その矢先へお秀の方から折れて出て母のお安が下谷から老の足を運んで復歸のこゝを頼みに来たのである。お照も喜んだ、準雄も喜んだ。彌七も別に故障を云はなかつた。

「坊ちゃんを大事にして呉れ。」
「これから必然氣を付けます。」
これだけの條件でお秀は再び番町の家へ歸つた。お秀は近所の評判も悪くなかつたので、隣の八百屋のお内儀さんも、向ふの靴屋のお婆さんも、再び彼女の顔を見たのを喜んだ。彌七の家も賑かになつた。お照は毎朝元氣好く鳥籠を洗つてゐた。
今朝も早く出た。さこの家でも拂ひ



が悪いので、一軒の金を集めるのに二度も三度も足を運ばなければならぬ。彼は朝飯を喫ひながら愚痴を云つてゐた。

お秀は壺所を片付けてゐた。お照は百頭の板橋を綺麗に掃いて、それから例の通りに鳥籠を持出した。毎朝彼女が籠を出すのを合圖のやうに、須藤翁が何時でも學校へ誘ひに来るのであつた。

「お早うございます。」お照は笑ひながら挨拶した。

「須藤君待つて呉れ給へ。今直行くから。」準雄は袴の紐を結びながら云つた。翁は店に腰をかけて鳥籠を眺めてゐた。自分の家で呉れた此の鳥籠が色々の波瀾を生んだことを彼は固より知らなかつた。

準雄は草包を肩にかけて出て来た。「お天氣は何うでせうね。」お照は陰つた空を覺束なさうに仰いだ。翁は

は傘を持つてゐなかつた。準雄も傘は要らないと云つた。
その聲を聞いて壺所からお秀が濡手を拭きながら出て来た。
「坊ちゃん。又あなたが濡れて歸つて被入る。お照さんや妾が吐られますからね。さうぞお傘をお持ちなすつて下さい。」

準雄は素直に洋傘を受取つて、翁に一所にすたく出て行つた。お秀は再び壺所へ入つた。お照は一心に生簀を指し始めた。坊ちゃんは大切に相違ないが、其の坊ちゃんの爲に色々の氣象をする。嬢を彼女は氣の毒に思つた。
お照が鳥籠の始末を終つた頃には、路を行く人の足音が早くなつた。露のやうな細い冷いものがお照の顔へ時々はらくミか、つた。

「をや、もう降つて来た。」
彼女は慌て、鳥籠を掛けて、狭い店から溢れ出してゐる商品を片附にか、る時、若い男が足早に入つて来た。彼は年頃廿一二の、色の白い小作りの、温順さうな商人風であつた。
「お早うございます。」

「まあ、精さん。お照は鳥渡狼狽へたやうに顔を赤くしたが、さあ、何うぞお上りなすつて……此の通り散亂してあるもんですから。」

「い、わ、私の家は猶大變ですよ。」
笑ひながら入つて来たのは、お秀の弟の精太郎であつた。姉がこゝへ嫁入した當時は未だ十五六の小兒盛りであつたが、今では立派な若い者になつて、店の方も自分が取仕切つて違つて行くやうになつた。まだ表向に斯ういふ約束した譯でもないが、將來はお照を彼の嫁にしたと云ふ考へが周囲の人々の胸に孕んでゐた。常人達も薄々それを知らないでも無かつた。
精太郎は小さい折草包と風呂敷包を店の傍へ置いて腰を掛けた。今日は急ぐから此處で御免を蒙るに云つた。
「まあ、可いちやアありませんか。お上んなさいませよ。」

お照が顔に上れと勤めてゐる處へ、お秀も奥から出て来て、秀も角も鳥渡上つて行けと云つた。精太郎は断り切れないで茶の間へ通された。彼が奥へ入るに同時に、廿三四の女中風の女が塵砂と洗濯石鹸を買ひに来た。女の歸る頃には雨が餘ほ強くなつた。
「さ、御寛な。大變降つて来たよ。幾ら傘を持つてゐたつて、少し止まして行かなくなつちや仕様がない。」
お秀は起つて兩戸を閉めにか、る風も少し交つてゐるらしい、裏の空地の葉雞頭が濡れた頭を重さうに揺かし

てゐた。
「あ、さうさう。」精太郎は思ひ出したやうに店へ出て行つたが、忽ちあ、と低く叫んだ。
「お照さん。こゝにあつた草包を知りませんか。」

「さうしたら。」精太郎は不思議さうに眼を疑らせた。